



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

自閉スペクトラム症における特別な興味：  
研究の動向と展望

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤野, 博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/166837">http://hdl.handle.net/2309/166837</a>

# 自閉スペクトラム症における特別な興味

## — 研究の動向と展望 —

藤野 博\*

教育実践創成講座

(2020年9月29日受理)

### 1. はじめに

特定の対象に向けられる強い興味関心は、KannerやAsperger以来、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下「ASD」と略記)<sup>注1)</sup>を特徴づける行動傾向のひとつとして取り上げられてきた。たとえば、Kanner (1943) は自動車運搬列車、煙突、振り子などに夢中になる子どもの例を挙げ、親の表現を借りてその状態を「強迫的興味 (obsessive interest)」と記述している。また、Asperger (1944/1991/1996) は自然科学、毒薬、数、機械装置に興味をもつ子どもについて報告しており、「自閉的興味」の現実離れた様相について指摘している。

DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013/2014) において、ASDの診断は「A: 社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」と「B: 行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」の2つの基準からなされる。こだわりに関係するBの基準は「(1) 常同的または反復的な身体の運動、物の使用、または会話、(2) 同一性への固執、習慣への頑ななこだわり、または言語的、非言語的な儀式的行動様式、(3) 強度または対象において異常なほど、きわめて限定された執着する興味、(4) 感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味」の4項目に分類されている。このうち(3)が特定のものへの強い興味に相当する特徴であり、その例として、「鍋に強くひき付けられる幼児、掃除機に夢中な子ども、何時間もかけて時刻表を書き出す成人」などが挙げられている。

「強迫的」「執着」などの表現で、病的な行動特徴と

して捉えられてきたASD児者の特定の対象に対する強い興味は、近年「特別な興味 (special interests)」としてより中立的に扱われる傾向にあり、ポジティブな側面にも光が当てられるようになった。そして、学習や生活の質 (QOL) などに肯定的な影響を与える可能性に目が向けられつつある。本論文では、ASD児者の特別な興味に関して現在までに得られている知見を整理し、特別な興味に向けられる対象、ASDの認知スタイルとの関係、学習や生活や精神的健康などへの影響について考察し、今後の研究と支援における展望を得ることを目的とする。

### 2. ASDの特別な興味に関する研究

#### 2. 1 興味の対象

ASD児の特別な興味に対する最初の系統的な調査は、Baron-Cohen & Wheelwright (1999) によって行われた。彼らは特別な興味を「強迫的興味 (obsessional interests)」と称している。そして、素朴物理学 (folk physics) と素朴心理学 (folk psychology) という概念を用いて、ASD児の興味の対象についての仮説を立てた。素朴物理学とは手にした物を離すと下に落ちるといった因果関係の理解のことであり、素朴心理学とは物に向かって手を伸ばしている人はその物を取ろうとしているといった行動の背後にある心の状態を推測することである。いずれも日常的な経験に基づく事象の認識方法である。ASD児は心的状態の理解に困難を示す一方、物的、機械的な因果関係の理解には問題を示さない (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1986)、という知見に基づき、ASD児は素朴物理学の領域に興

\* 東京学芸大学 教職大学院 (184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1)

味が偏るのではないかという仮説のもとに質問紙による調査が行われた。平均年齢11歳のASD児と、対照群として、ほぼ同年齢の強迫性の行動が問題となることの多いトゥレット症候群の子どもの保護者に、子どもが各カテゴリーの強迫観念 (obsession) を持ったことがあるかどうかを質問し、具体的な内容の記入を求めた。設定されたカテゴリーは、物理システム、コンピュータ、天文学、その他の科学、建築物などの素朴物理学の領域、想像力、人間関係、ゴシップ、欲求、信念、意図、感情などの素朴心理学の領域、など計6つの中核的領域と、食事やスポーツなどの8種類の日常的な活動、および触覚や嗅覚などの感覚現象からなっていた。調査の結果は仮説を支持し、ASD児は素朴心理学よりも素朴物理学の領域に興味をもつ傾向が明らかとなった。また、ASDとトゥレット症候群では強迫観念の内容が異なることも報告されている。この研究はASD児者の特別な興味に関するその後の研究を方向づけるものとなった。

Turner-Brown, Lam, Holtzclaw, Dichter, & Bodfish (2011) は Bodfish (2003) の興味尺度を用いて特別な興味の調査を行っている。6歳から17歳までのASD児と定型発達 (以下、TD) 児を対象とし、子どもが興味を持っているものについて保護者に回答を求めた。その結果、機械、乗り物、建物などの素朴物理学に関する事柄はASD群がTD群よりも興味を示していた。興味の程度に関しては、ASD群では70%が「普通ではない」と評価された興味を少なくとも1つ持っていた。大多数は、2つ以上の特別な興味を持っており、1つのトピックに固定されていないことがわかった。この結果は、特別な興味は限定されており柔軟性がないという先行研究での指摘と相反するものであった。

Jordan & Caldwell-Harris (2012) は、インターネットのディスカッション・フォーラムの投稿から特定の興味やこだわりに関する言葉を収集する方法で調査を行った。平均年齢20歳台のASD者とTD者が対象となり、強迫観念質問紙 (Baron-Cohen & Wheelwright, 1999) のカテゴリーでコーディングが行われた。その結果、TD群ではスポーツとゲームの話題が多かったが、ASD群では科学、歴史と文化、動物、情報と機械システム、機械とテクノロジー、乗り物などの話題が多かった。また、ASD者はTD者よりも検索頻度が少なかったが、それはASD者の興味の幅が狭いことを示唆している。

Cho, Jelinkova, Schetze, Vinette, Rahman, McCrimmon, Dewey & Bray (2017) は、10代後半のASD者とTD

者を対象とし、事前インタビューによってASD者とTD者それぞれが興味をもつ対象を同定し、その画像を参加者に提示し、好みの程度を評価することを求めた。取り上げられたテーマは、ASD者ではアニメ、ガジェット、レゴ、機械、などで、TD者では動物、アート、有名人、スポーツ、などであった。各テーマの画像を提示し、どの程度好きかを7段階尺度で評価するよう求めた。その結果、「有名人」の画像のみ、TD者のほうがASD者よりも好まれたが、それ以外は差がなく、ASDの有無よりも年齢や性別の効果のほうが大きかった。ASD者よりもTD者の方が社会的なイメージを好む傾向はあったが、ASD群において、ASD向きを想定した画像とTD向きを想定した画像との間に好みの有意差はなかった。

Groove, Hoekstra, Wierda, & Begeer (2018) は平均年齢42歳のASD者を対象として調査を行い、特別な興味を持っているかどうかを質問し、持っている場合はトピックをリストするよう求めた。その結果、全体の65%が少なくとも1つの特別な興味を報告した。男性は女性よりも多かった。また、ほとんどの参加者が2つ以上の特別な興味を報告していた。自閉症、コンピュータ、ゲーム、音楽が、すべての参加者に共通する最も一般的な興味の対象であった。女性では自閉症、自然とガーデニング、芸術と文化が好まれ、男性ではコンピュータとゲーム、音楽とバンド、自閉症が好まれていた。自閉症、自然とガーデニング、人体や心理学、動物、芸術と文化に興味を持つ人は女性の方が男性よりも有意に多く、男性は女性よりも幅広い活動に興味を持っていることが明らかとなった。

Klin, Danovitch, Merz, & Volkmar (2007) の研究は、以上の研究に共通する物的 (素朴物理学) / 心的 (素朴心理学) という対立軸をもつカテゴリー設定でなく、言語や視覚など情報処理のモダリティに焦点を当てている。自由記述式の質問紙で、保護者に自分の子どもが異常に強い興味を示すかどうかを質問し、肯定の回答だった場合、興味向けられているトピックを3つまでリストアップし、その例を挙げることを求めた。現在の興味に加え、過去の様々な年齢時における興味を回想して回答する形式であった。トピックは次の8種類に分類された。(1) 言語記憶を伴うシステムやトピックの中での情報収集、(2) 視覚記憶を伴うシステムやトピックの中での情報収集や活動、(3) 感覚的な刺激を求める活動、物の配列、同一性の追求 (4) 数の記憶、計算、抽象的な図形、(5) 情報の分類と順序付け (6) 誕生日、カレンダー、時間概念、(7) 物の収集、買いだめ、(8) 文字と数字 (このカテゴリー

のみ就学前児のみに適用)。その結果、特別な興味を持ち方として最も多かったのは、言語記憶による情報収集であり、就学前児の3分の2以上、小学生では4分の3以上の子どもがそのような形式の興味を示していた。また、両年齢群ともに約4分の1の子どもが視覚記憶による情報収集に興味を示していた。一方で、物や感覚を求める行動はあまり見られなかった。さらに、対象者の3分の1は就学前期に文字や数字に魅了されていた。

## 2. 2 特別な興味のネガティブな影響

Klin et al. (2007) は、保護者に、子どもの自由な時間のうち、どのくらいの時間を興味が向けられたことに費やしたか、子どもの家族や仲間などとの交流において、興味のあるトピックに費やされた時間についての質問も行っている。「時々」(時間の25%未満)、「かなり」(時間の25%から75%の間)、「ほとんどいつも」(時間の75%以上)の3段階の尺度で「干渉(interference)」の程度が評価された。その結果、就学前児では、自己主導的な活動に有意に多くの干渉があり、家族、仲間、および他の大人が関与する活動にも同等のレベルの干渉があることがわかった。同様の結果が小学生の児童でもみられ、自己主導的な活動への干渉が有意に多く、家族が関与する活動、ピア、および他の大人への干渉が同程度のレベルであった。また、就学前児では、干渉の程度と Vineland 適応行動尺度の社会性領域との間に有意な相関があった。小学生では、干渉の程度と Vineland のコミュニケーション領域および社会性領域との間に有意な相関があった。このように、小学生時代に特別な興味が学習や社会的交流の妨げになることが多かった子どもは、コミュニケーションや社会的適応のスコアが低かった。

Turner-Brown et al. (2011) の研究でも、ASD 児は TD 児に比べて、他の活動への干渉の程度が高く、中断されたときの抵抗度が高く、柔軟性が低く、他者を巻き込むことへの気遣いが少ないことが示されている。そして、ASD 児の興味の本数は TD 児と差がないが、興味の質や内容は異なっていることと、興味に関連する機能障害の程度は ASD 児で有意に高いことが報告された。

## 2. 3 特別な興味のポジティブな影響

Groove, Roth, & Hoekstra (2016) は、特別な興味の動機付け尺度 (Special Interest Motivation Scale : SIMS) を用いて、自閉スペクトラム特性 (Autism Spectrum Conditions, 以下「ASC」と略記) を有する人の興味と

動機づけとの関連について調査を行った。因子分析の結果、個人的な人生の価値観と目標、内発的な興味と知識、威信、エンゲージメントと「フロー」、達成の5つの因子が抽出された。フローとは何らかの活動に完全に没入しているときに経験する精神状態のことである (Csikszentmihalyi, 1990)。そして、ASC 群は統制群よりも内発的な興味と知識、エンゲージメントとフローを評価する因子において高いスコアを示し、内発的要因によって強く動機づけられていることが示された。個人の価値観と目標、威信を評価する2つの外発的動機づけの因子については両群間に有意差はなく、外発的動機は特別な興味に大きな役割を果たしていないことが示唆された。

Grove et al. (2018) は、特別な興味に従事した週の日数と1日の時間も調査している。そして、特別な興味が自分の生活にどの程度プラスの影響を与えているかと、自分の特別な興味が日常生活にどの程度の影響を与えているかについて自己評価を求めた。その結果、参加者の56%が、週7日、特別な興味に時間を費やしていると報告し、1日に0~2時間(31%)から2~4時間(37%)を特別な興味に費やしていた。そして、ほとんどの回答者は、興味が障害になっていると考えておらず、むしろポジティブな影響を与えていると回答した。さらに、3種類の主観的ウェルビーイングの評価尺度と SIMS (Groove et al., 2016) も実施し、特別な興味とウェルビーイングおよび動機づけの関係を分析し、特別な興味を持っている人と持っていない人の間に全体的な主観的ウェルビーイング得点に有意差がないことを示した。また、SIMS の価値観と目標、およびエンゲージメントとフローは主観的ウェルビーイングを有意に予測し、価値観と目標は生活満足度のうち余暇領域の得点を予測した。特別な興味を持っている ASD 者は持っていない人に比べて余暇の満足度が高かった。しかし、特別な興味に費やした週当たりの日数および1日あたりの時間と主観的ウェルビーイングとの間には負の相関があった。

## 3. まとめと考察

### 3. 1 特別な興味の対象

ASD 児者は TD 児者よりも特定の対象に対する強い興味をもつことが多く、その対象としてはメカニクなものが多い。それは Kanner や Asperger 以来指摘され、エピソードとしてよく語られてきたことであるが、機械、コンピュータ、乗り物、建築物などが興味の対象として選ばれやすいことは、Baron-Cohen &

Wheelwright (1999) とそれに続く調査によってASD児者の一般的な傾向であることが確かめられた。ASD当事者の自伝にも「僕には並外れた集中力がある。ある機械装置を調べて、それを自分にとっての全世界とすることができる。」(Robison, 2011/2012) などの記述がみられる。Baron-Cohen (2003/2005) はそのような認知の傾向を「システム化 (systemizing)」と名付け「共感化 (empathizing)」と対比させている。そして、Baron-Cohen & Wheelwrightの知見は、ASD児の興味においてはシステム化が共感化に勝るというものであった。

ところで、システム化は共感化と対立する心的傾向なのだろうか。13歳のASD当事者のJackson (2002/2005) はコンピュータへの熱中を語る一方、「ASの子は、ノンフィクションの本のほうが好きだっていう人もいる。それは絶対にまちがいない。ぼくは、だいたい97%の割合でフィクションのほうが好き。一番好きなのは、冒険物語」と述べている。ASD当事者である10歳のHall (2001) も「ナルニア国年代記」のようなファンタジー冒険物語が大好きで何度もくり返し読んだことを述べている。共感化-システム化理論の観点からは、ASD者はテクニカルな、あるいは事物を分類した図鑑的な本を好み、登場人物への感情移入が読書の楽しみにつながるフィクションの本には興味が向かないことが予想されるが、それに反するコメントといえる。共感化とシステム化がトレードオフの関係にあるのか独立した2つの次元なのかは十分に明らかになっていないようである (Wheelwright, Baron-Cohen, Goldenfeld, Delaney, Fine, Smith, Weil, & Wakabayashi, 2006)。両者は両立し得るものであり対立的に考えるべきではないのかもしれない。

また、Cho et al. (2017) は好むか否かの2択でなく、好みの程度を測定する形式で調査を行い、ASD者とTD者の興味の傾向には従来の言説や先行研究の知見から予想されるほどの差がなかったことを示した。そして、ASDの有無よりも、むしろ年齢や性別の効果のほうが大きいことが明らかとなっている。この知見や当事者の発言から、ASD児者は機械や電車が好きといった単純なステレオタイプで捉えることの危険性が示唆される。10代 (Baron-Cohen & Wheelwright, 1999), 20代 (Jordan & Caldwell-Harris, 2012), 40代 (Groove et al., 2018), と年齢を増すにつれて、ASD児者の興味の範囲が拡大していく傾向をみることもできる。

### 3. 2 特別な興味と認知スタイル

ASD者の認知スタイルに関する理論として、共感化-システム化理論の他に「弱い中枢性統合理論」が

ある (Frith & Happé, 1994)。「木を見て森を見ず」という成句でよく表現されるように、全体よりも局所に注意が向きやすい認知傾向のことである。知的障害を伴うASD者が芸術や計算などの分野で示すことがあるサヴァン能力は弱い中枢性統合の観点から説明されている (Happé, 1999)。一度きりごく短時間だけ見た風景を絵で緻密に再現できるなどのサヴァン能力に共通する細部への並外れた集中力と正確な情報処理の理由として、この理論は一定の説明力をもつ。そして、ASD者の特別な興味も弱い中枢性統合理論によって説明できる面がある (Attwood, 2003, Klin et al., 2007)。ASD者の興味の対象は物の細部に興味が向く傾向を反映していると考えられる。中枢性統合理論によると、ASD者は部分を全体に統合させることに弱さがある。Attwood (2003) は特別な興味は部分を全体に統合させる試みであり、統合の弱さを補う方略である可能性を指摘している。事物の収集と分類は部分を全体に位置づけることにつながり、それによって満足感と安心感を得ることができる。このことは、ASD当事者の次のような述懐と一致する (Fletcher-Watson & Happé, 2019)。

私は周りの世界のことを尋ねていました。5歳の時にウェールズで休暇を過ごした時に石を拾い、化石を見てそれは何なのかと尋ねました。この一つの行為をきっかけに、私は一生をかけて探求するようになりました。今では、それが必ずしも社会的な意味を持つものではないことがわかります。私は細部への渴望を持っていましたが、それが時間であれ位置であれ、グローバルなスケールの中でどこに当てはまるのかを知りたいとも思っていました。私はいつも「これはどこに当てはまるのか」と尋ねていました。

Baron-Cohen (2003) は、システム化への志向性をもつ人は、法則に従って変化する細部に注目するが、細部にだけ目が向くわけではなく、部分の集積としてのシステム全体にも関心に向けることも指摘している。それゆえに、システム化傾向は弱い中枢性統合理論では説明できないとしている。しかし、この2つの理論は矛盾せず両立し得るものと考えられる。中枢性統合の弱さは全体が把握できないという機能の欠損でなく、局所に優先的に注意が向くという認知の傾向であり、全体への注意を排除するものではないからである。また、システム化への志向はメカニク的な物にだけでなく文化的な事象にも向けられる。Jordan et al. (2012) の調査ではASD者に歴史や文化への興味

がみられたが、特定の歴史上の出来事や日付などの情報は、システム化の能力と細部への注意力が高い人にとって魅力的だろうと考察している。ASD児者のもつトリビアンな知識は詳細で系統的であるが、それは部分への注目とシステム化の両側面をもつといえる。

しかし、共感化-システム化理論でも弱い中枢性統合理論でも説明しにくい興味の傾向もある。それはKlin et al. (2007) が明らかにしたように言語への志向性である。ASD児は言語的な記憶・学習による情報収集によって興味の活動に従事していた。そのような傾向はASD者の自伝にも記述がみられる。Hall (2001) は次のように述べている。「いつでも言葉に興味がある。」「言葉でできる遊びが大好き」「読書にたっぷり時間を使う。」「新しいことを学ぶのに一番いいやり方のひとつは、読書を通じて学ぶこと。」「読んだとき、確かに一番よくものを覚える。」またJackson (2002) は「ASの人たちって、ほかの人がしゃべるのを注意して聞く時間が短いと思うんだ。その分、本から単語を仕入れることが多くなる」と述べている。言語でも音声言語よりは文字言語に関心が向きやすいこともKlin et al. (2007) の研究から明らかとなっている。このような傾向は、興味という範疇を超えて、情報処理のスタイルに関わってくる問題と思われる。この問題を考えるうえで「選好性 (preference)」という切り口が有効かもしれない。選好性については後に議論する。

### 3. 3 特別な興味の学習と精神的健康への影響

特別な興味のネガティブな影響としては、Klin et al. (2007) が明らかにしたように、興味の活動に没頭することで、自習や他者との交流の時間が減ることがまず挙げられる。また、Turner-Brown et al. (2011) は、興味の活動が中断されたときの抵抗が強く高く、切り替えが難しいことや他者を巻き込むことへの気遣いがないことを指摘している。Jackson (2002/2005) は自伝で「ついさっきまでは、ある話題を『ものすごく楽しんでいる』だけのはずだった。なのに、はっと気づいたら、頭がその話題に乗っ取られてしまってる」と述べている。また、Klin et al. (2007) は、コミュニケーションと社会性に負の影響があることを示唆している。Groove et al. (2018) は、特別な興味に費やした時間の長さ主観的ウェルビーイングとの間に負の相関があることを示した。つまり、生活の大半が趣味に費やされてしまうと幸福度はかえって下がってしまうということである。

一方、ポジティブな影響は赤字を補って余りあるほ

どある。まず、学習に対する影響について、Klin et al. (2007) は、TD児は社会的経験から学ぶのに対し、ASD児は言語的に学ぶことを示唆している。そして、ASD者は特別な興味のあることについて学ぶことを通して周囲の世界を理解しようとするが、それが最も自然に身につく、最も楽しめる手段であるかもしれないと論じている。また、Groove et al. (2016) は特別な興味の追求は内発的動機づけが関わっていることを明らかにした。Robison (2011/2012) は自伝で次のように書いている。「僕は常に、細かいところに注意を払ってきた。」「僕には並外れた集中力がある。ある機械装置を調べて、それを自分にとっての全世界とすることができる。」「この並外れた集中力は知識に支えられたものであり、その知識は心理学者が言うところの“特別な興味”から生まれたものだ。」そして「可能な限りの知識を得て、できるだけ完璧に仕事をこなしたい」という強い欲求があるという。また、Jackson (2002) の自伝には次のような記述がある。「ASの人たちはたいてい、なにかに『取りつかれる』。好きなテーマに夢中になるんだ。もっとも、ほくは、『取りつかれる』なんていうより、『専門分野がある』っていう方が好きだけどね。」いずれの記述からも、内発的に動機づけられた特別な興味への従事が学習を促進することを示唆している。そして、特別な興味によって蓄積される専門知識は雇用につながる可能性をもつ (Attwood, 2003)。Robison (2011/2012) は「子どもの頃は自分の世界に没頭していることを笑われたが、旧式のエンジンを調整する大人となった今は、誰からも笑われない」と述べている。

また、特別な興味は複雑な社会を理解し不安を和らげるという知見 (Klin et al., 2007), はJackson (2002) の「なにかを集めることで、気持ちが安定する」「この世界は不規則なことでいっぱいだからね。そんな中で毎日くらしていると、自分まで混乱してきちゃう。そんな混乱した気持ちをふりはらうには、集めたものを整理するのがすごくよくきくんだよ」という叙述と呼応するものである。

精神的健康に対する影響については、Groove et al. (2018) が、没頭できるものがあると主観的ウェルビーイングは高まることを示唆している。加藤・藤野 (2016) は、平均年齢14歳のASD児を対象として、テーブルトーク・ロールプレイングゲーム (TRPG) による趣味の活動を定期的実施し、初回と最終回に「子どものQOL尺度」を実施し、QOLを比較した。その結果、いくつかの下位尺度で有意な得点の向上がみられ、効果量が最も大きかったのは「精神的健康」で

あった。参加者からは「TRPGは笑いの絶えない活動だった」、「日常の中にある選択肢よりも、TRPGのほうがずっと選択肢が多い」などの感想が得られている。特別な興味はストレスや不安を軽減することが指摘されているが (Attwood, 2003), マイナスをゼロに近づけるだけでなく、精神的健康とQOLを向上させる、すなわちプラスを増やす可能性があるようである。

### 3. 4 選好性という観点の可能性

近年、選好性という観点が注目されている。本田 (2018) はASDの発達の特徴を機能の欠損として捉えるのではなく、「～よりも～を優先する」という選好性の偏りとして捉えることを提唱している。本田によると、選好性とは心が特定の方向に向かうという志向性の問題で、自閉スペクトラムの人は対人関係よりもこだわりを優先するという選好性をもつと考えることができる。できるできないでなく優先順位の問題なのである。共感化-システム化の問題も、全体か局所かの問題も選好性という視点から考え直すことができるかもしれない。つまり、志向性の問題としてみるわけである。当事者の記述からも推察されるように、ASD児者はシステム化が優先されても共感化が働かないわけではなく、まず局所に注意が向くものの全体に注意を向けられないわけではない。そして、その行動傾向は内発的に動機づけられている。特別な興味が強迫症状であり機能障害なのであれば、その問題を克服するための介入が必要ということになるだろうが、内発的に動機づけられた選好性の問題であるなら、それはその人の自然な傾向であり、強みとして生かされるべきだという議論になるだろう。内発的に動機づけられた行動に従事するなかで経験し習得した知識や技能を社会的な活動に拡げていける可能性があるのではないだろうか。

そして、選好性という視座をもつことによって、興味やこだわりの問題だけでなく、従来、障害や機能不全と考えられてきたものを新たな観点から検討し直すこともできるだろう。例えばASD児はTD児に比べ、場面や相手に関わらず丁寧な表現をする傾向がある (八耳・藤野・東條・計野, 2008)。このような特徴はこれまで丁寧さの調節の失敗の問題として認識されてきた (Baltaxe, 1977)。しかし、言語コミュニケーションの選好性の問題として考えることもできるのではないだろうか。Jackson (2002) は「ぼくはとっていてもいねいなことばづかいを心がけている。・・・ぼくは、たいがいの人に『とても礼儀正しい子だね』って

言われるよ」と述べている。この記述からは、ASDの人は砕けた言い方ができないのではなく、丁寧な言い方を選んでいると考えることができる。言語表現の丁寧さだけでなく、ASD者が独特の言語感覚をもつことは他の当事者の自伝にも記述がみられる (Hall, 2011)。大井 (2020) の研究グループは、通常とは異なる語の組み合わせであるコロケーション・エラーの観点からこの問題を検討している。

近年、神経多様性 (Neurodiversity) の概念が広く知られるようになり、マイノリティのユニークな認知スタイルを肯定的に捉える観点の重要性が認識されるようになった。ASD児者のTD児者とは異なる言語、コミュニケーション、学習の選好性を明らかにできれば、いかなる表現様式で伝えると受容されやすいか、動機づけが高まるかといったことの解明につながり、発達支援や特別支援教育の新たな展望が開けるだろう。

### 注

注1) 「自閉スペクトラム症 (ASD)」はDSM-5によって確立した診断名であるが、本論文では、それ以前の文献で「自閉症」や「広汎性発達障害」として記載されてきたものも含め「自閉スペクトラム症 (ASD)」の名称で統一する。

### 謝辞

本研究はJSPS科研費 (課題番号: 20K02994) の助成を受けました。

### 文献

- American Psychiatric Association (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル (高橋三郎・大野 裕, 監訳). 東京: 医学書院.
- (American Psychiatric Association (2013) Diagnostic and statistical manual of mental disorder, Fifth edition. Arlington: American Psychiatric Publishing.)
- Asperger, H. (1996) 子供の『自閉的精神病質』(富田真紀, 訳). 東京: 東京書籍. (Frith, U. (Ed.) (1991) *Autism and Asperger Syndrome* (pp.37-91). Cambridge: Cambridge University Press. (Original work published 1944))
- Attwood, T. (2003). Understanding and managing circumscribed interests. In M. Prior (Ed.), *Learning and behaviour problems in Asperger syndrome* (pp.126-147). New York: Guilford Press.
- Baltaxe, C.A.M. (1977). Pragmatic deficits in the language of

- autistic adolescents. *Journal of Pediatric Psychology*, 2, 176-180.
- Baron-Cohen, S. (2005). 共感する女脳、システム化する男脳 (三宅真砂子, 訳). 東京: NHK出版. (Baron-Cohen, S. (2003). *The Essential Difference: Men, Women and the Extreme Male Brain*. London: Allen Lane.)
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1986). Mechanical, behavioural and intentional understanding of picture stories in autistic children. *British Journal of Developmental Psychology*, 4, 113-125.
- Baron-Cohen, S., & Wheelwright, S. (1999). 'Obsessions' in children with autism or Asperger Syndrome: a content analysis in terms of core domains of cognition. *British Journal of Psychology*, 175, 484-490.
- Bodfish, J.W. (2003). Interests Scale. Chapel Hill, NC.
- Csikszentmihalyi, M. (1990). Flow: The psychology of optimal experience. New York: Harper and Row.
- Cho, I.Y.K., Jelinkova, K., Schetze, M., Vinette, S.A., Rahman, S., McCrimmon, A., Dewey D., Bray, S. (2017). Circumscribed interests in adolescents with Autism Spectrum Disorder: A look beyond trains, planes, and clocks. *PLoS One*, 12(11), e0187414.
- Groove, R., Hoekstra, R.A., Wierda, M., & Begeer, S. (2018). Special interests and subjective wellbeing in autistic adults. *Autism Research*, 11, 766-775.
- Groove, R., Roth, I., & Hoekstra, A. (2016). The motivation for special interests in individual with autism and controls: Development and validation of the special interest motivation scale. *Autism Research*, 9, 677-688.
- Fletcher-Watson, S., & Happé, F. (2019). Autism: A new introduction to psychological theory and current debate. New York: Routledge.
- Frith, U., & Happé, F. (1994). Autism: Beyond "Theory of mind". *Cognition*, 50, 115-132.
- Happé, F. (1999). Autism: Cognitive deficit or cognitive style? *Trends in Cognitive Sciences*, 3, 216-222.
- Hall, K. (2001). ぼくのアスペルガー症候群: もっと知ってよ ぼくらのことを (野坂悦子, 訳). 東京: 東京書籍. (Hall, K. (2001) *Asperger Syndrome, the universe and everything*. London: Jessica Kingsley Publisher Ltd.)
- 本田秀夫. (2018). 発達障害 生きづらさを抱える少数派の「種族」たち. 東京: SBクリエイティブ.
- Jackson, L. (2005). 青年期のアスペルガー症候群—仲間たちへ、まわりの人へ (ニキ・リンコ, 訳). 東京: スペクトラム出版社. (Jackson, L. (2002) *Freaks, geeks & Asperger Syndrome: A user guide to adolescence*. London: Jessica Kingsley Publisher Ltd.)
- Jordan, C.J., & Caldwell-Harris, L. (2012). Understanding Differences in neurotypical and autism spectrum special interests through internet forums. *Intellectual and Developmental Disabilities*, 50, 391-402.
- Kanner, L. (1943). Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-253.
- 加藤浩平・藤野 博. (2016). TRPGはASD児のQOLを高めるか? 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 67 (2), 215-221.
- Klin A., Danovitch, J.D., Merz, A.B., & Volkmar, F.R. (2007). Circumscribed interests in higher functioning individuals with autism spectrum disorders: An exploratory study. *Research & Practice for Persons with Severe Disabilities*, 32, 89-100.
- 大井 学. (2020). 子どもの「コミュ障」: 発達障害のもう一つの顔. 東京: 金子書房.
- Robison, J.F. (2012). 変わり者でいこう: あるアスペルガー者の冒険 (藤井良江, 訳). 東京: 東京書籍. (Robison, J.F. (2011). *Be different: Adventures of a free-range Aspergian*. New York: Crown Archetype.)
- Turner-Brown, L.M., Lam, K.S.L., Holtzclaw, T.N., Dichter, G.S., & Bodfish, J.W. (2011). Phenomenology and measurement of circumscribed interests in autism spectrum disorders. *Autism*, 15, 437-456.
- Wheelwright, S., Baron-Cohen, S., Goldenfeld, N., Delaney, J., Fine, D., Smith, R., Weil, L., Wakabayashi, A. (2006). Predicting autism spectrum quotient (AQ) from the systemizing quotient-revised (SQ-R) and empathy quotient (EQ). *Brain Research*, 1079, 47-56.
- 八耳悠人・藤野 博・東條吉邦・計野浩一郎. (2008). 自閉スペクトラム症児における依頼表現の特徴—ポライトネスの観点から—. 日本発達心理学会第29回大会論文集.

# 自閉スペクトラム症における特別な興味

—— 研究の動向と展望 ——

## Special Interests in Individuals with Autism Spectrum Disorder:

### A Review of Research Trends and Prospects

藤野 博\*

FUJINO Hiroshi

教育実践創成講座

#### Abstract

Special interests are one of the most common characteristics of individuals with autism spectrum disorder (ASD). In this review, research findings of the special interests of individuals with ASD are summarized. Findings have revealed that individuals with ASD tend to have a special interest in physical systems including machines, computers, vehicles, and buildings in comparison to their typically developing peers. However, a finding has further indicated that stereotypical judgments should be deterred as age and gender are relevant in special interests. Although some aspects of special interests in ASD have been explained by the “empathizing-systemizing theory” and “weak central cohesion theory”, the aspect such as acquiring information through verbal memory cannot be explained by these theories. It is recommended that future research explores this aspect. Furthermore, although special interests may have a negative influence on learning and social interaction, other aspects have a positive effect thereof, in that they promote intrinsically motivated learning and enhance quality of life. It is also recommended that future research explores special interests in the view of “preference”.

**Keywords:** autism spectrum disorder, special interests, cognitive style, preference

*Advanced Studies on Transforming Educational Practice, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** ASD児者の特別な興味に関する現在までの研究をレビューし、特別な興味に向けられる対象、ASDの認知特性との関係、学習や精神的健康への影響について考察した。ASD児者は機械、コンピュータ、乗り物、建築物など、物的なシステムに関するものに興味をもつことが多かった。しかし、興味の対象には年齢や性別も関係するため、ステレオタイプな判断はできないことも示唆された。ASD者の特別な興味は「共感化-システム化理論」と「弱い中枢性統合理論」によって説明できる面があるが、言語記憶による情報収集など、それらの仮説では説明できない側面もあり、今後の検討が必要と考えられた。学習や他者との交流のための時間が減ることは特別な興味のネガティブな影響であり、内発的な動機づけによる学習の促進とQOLが高まる可能性はポジティブな影響である。そして最後に、「選好性」は今後の研究の重要な視点になる可能性が示唆された。

**キーワード:** 自閉スペクトラム症、特別な興味、認知特性、選好性

---

\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)